

津軽 世去れ節



嘉瀬の桃

嘉瀬の桃こと黒川桃太郎は、仁太坊の芸に魅せられ24歳のとき、弟子入りします。大正時代、唄会の人気者で中でも「調子変わりのよされ節」は桃の独壇場でした。今日唄われる津軽の三つ物、よされ節・小原節・じょんから節の型を作ったことから、津軽民謡中興の祖と言われています。
(五所川原市金木地区 津軽三味線会館)

【話芸】名取裕子

青山学院大学在学中、TBSの朝のテレビ小説「おゆき」のヒロイン役でデビュー。その後「3年B組金八先生」(TBS)やNHK大河ドラマ「黄金の日々」などのドラマに出演。1982年、松本清張原作のNHKドラマ「けものみち」での悪女役で新境地を開く。さらに映画では「序の舞」「時代屋の女房2」「吉原炎上」「妖女の時代」をはじめ、数々の話題作に出演。「異人たちとの夏」「マークスの山」では日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。また「KOYA」では日本映画批評家大賞の奨励賞を受賞。1988年には蛭川幸雄演出「タンゴ・冬の終わりに」で初舞台を踏んだ後、「七人みさき」「にぎり江」などの蛭川作品や、新橋演舞場では「女系家族」「御宿かわせみ」「吉原炎上」「花の天勝」などと4年連続で出演。華やかな容姿と確かな演技力で舞台女優としても注目を浴びる。「法医学教室の事件ファイル」(テレビ朝日系でこれまでに47作を放送)「京都地検の女」(テレビ朝日系)や「マルホの女」「特命刑事 カクホの女」(テレビ東京系)などの人気シリーズに主演し、好評を博しているほか、「さくらの親子井」「10の秘密」(フジテレビ系)と多くのドラマに出演している。現在「オールナイトニッポンMUSIC10」(毎月第1・第3水曜日)のラジオパーソナリティを務めている。また、「今夜はノンブレ」「Qさま!!」「林修の今知りたいでしょ!」(テレビ朝日系)などのクイズバラエティにも出演。2015年より「みちのく巡礼話芸劇場」シリーズに取り組み、第1作として同年10月〈松尾芭蕉〜おくのほそ道〉若手県西和賀町銀河ホール公演。2019年8月第2弾〈長部日出雄作・津軽世去れ節〉秋田県鹿角市文化の杜交流館コモッセ公演。第3弾2020年11月〈津軽世去れ節〉若手県釜石市民ホールTETTO公演。第4弾2021年11月〈続 津軽世去れ節〉秋田県鹿角市文化の杜交流館コモッセ公演。第5弾2023年10月〈艶子姐さん〜釜石最後の芸者物語〉若手県釜石市民ホールTETTO公演。今回の大館公演は、第6弾となる。「名取裕子みちのく巡礼話芸劇場シリーズ」は単なる朗読ではないジャンルを超えた新たなクロスオーバーな舞台シリーズとして注目されている。



【民謡】佐野 よこ

三歳の頃から習い始めた民謡は南部牛追唄・外山節・南部木挽唄・南部酒屋唄・南部山唄・南部馬方節・次内甚句・南部馬の唄全国大会など若手県内で開催される数々の全国大会を制覇し第49代若手県知事杯争奪民謡王座を獲得、平成28年には第56回日本郷土民謡民舞全国大会で優勝、内閣総理大臣賞を受賞した。現在は東日本大震災での被災経験を機に故郷に民謡で元気を届ける「佐野よこ民謡プロジェクト」を立ち上げ心の復興事業にも力を入れている。2020年3月初の民謡集「天までとどけ」を日本コロムビアよりリリース。
釜石観光物産親善大使
釜石市市政功労章奨励賞受賞



【尺八・横笛・太鼓】村松 幸一

尺八、横笛、三味線奏者。三味線を照井真実都、尺八を岩井利信に師事。
もともと、三味線プレイヤーであったが、三味線奏者は沢山居るが、尺八奏者には若い人がほとんど居ない事に気付き、このままでは、この先尺八奏者がいなくなってしまう事を案じ、尺八を始める。
現在は、各種大会やレコーディングの伴奏やステージなどで、三味線プレイヤーと尺八プレイヤーの2つの顔で活動中。



【津軽の古老】成田 義正

青森県津軽半島十三湖のある市浦村出身。五所川原市に合併後の市浦総合支所長を定年退職後、道の駅『十三湖高原』駅長等を歴任。根っからの春日八郎好きで十八番は「赤いランプの終列車」。歌い出すと留まらず。高卒後、上京するも津軽の言葉が通用しないため、NHK鈴木文彌アナの物まねや、独学での自主練習で言葉の壁を克服する。長けたトークはここの経験により醸成されたか。
名取裕子みちのく巡礼話芸劇場には、2020年若手県釜石市民ホールTETTOでの「津軽世去れ節」公演より出演。



【津軽三味線】三代目 井上 成美

1987年生まれ、若手県盛岡市出身・在住。6歳より故・初代井上成美に師事し、11歳より黒澤博幸氏に津軽三味線の手ほどきを受ける。
平成18年に故・初代井上成美師より「井上成美由」と命名される。
平成26年に三代目井上成美を襲名。古くから受け継がれてきた民謡の三味線伴奏者としての活動を中心に、ソロ活動や他楽器とのコラボレーション演奏など、幅広いジャンルで県内外を問わず活動している。

【写真】小島 一郎(1924-1964)



1924(大正13)年、青森市大町(現本町)6丁目、県内で最も古い写真材料商を営む家の長男として生まれる。父・平八郎は写真家で、青森県写真材料商組合の初代組合長を務めた県写真界の草分け。1944(昭和19)年、入隊し、中国各地を転戦。二年後に復員し、家業の材料商を継ぐ。1954年、平八郎が創始した写真家のグループ「北陽会」の会員となり、本格的に写真始める。1956年、この頃日本の報道写真の先駆者・名取洋之助と出会い大きな影響を受ける。1958年、初個展「津軽」(小西六ヶアリアー・東京)。1961年に上京し、フリーカメラマンに。《下北の荒海》で「カメラ芸術」新人賞受賞。1962年、第2回個展「凍ばれる」(富士フオサロン・東京)。1963年、新潮社から「津軽 一詩・文・写真集」(文・石坂洋次郎、詩・高木恭造)が刊行される。年末から翌年にかけての冬季に行なった北海道での撮影旅行中に体調を崩す。1964年7月、青森市内で急逝(没年齢39歳)。

■AOMORI GOKAN アートフェス2024後期コレクション展
生誕100年・没後60年 小島一郎 リターンズ Kojima Ichiro Returns
会期2024年7月6日①～9月29日④青森県立美術館地下1階展示室